BROADCASTING　CREATORS'　ASOCIATION

放送人の会

No・27
2006・5・26

〒102－0094　千代田区紀尾井町1－1　千代田放送会館　3階
TEL&fax　03－3221－0019　Mail　info@hosojin.com
代表幹事　今野勉　　編集担当　伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一

上段左から　小野さおり　藤木達弘　上原直彦　五十嵐文郎
下段左から　久世烈（長男）　久世朋子（夫人）川口幹夫選考委員長　日下千恵子（夫人）中野文恵

グランプリ
上原　直彦
（琉球放送・パーソナリティ）

特別賞
「NHKスペシャル・靖国神社～占領下の知られざる攻防～」の制作スタッフ
（代表、藤木達弘）

五十嵐　文郎
（テレビ朝日・プロデューサー）

小野さおり
（NHK・音響デザイナー）

中野　文恵
（東北放送・ラジオディレクター）

特別功労賞
故・久世　光彦
（テレビディレクター）

故・日下雄一
（テレビプロデューサー）

【選考経過】

五回目となる今回のグランプリは、これまで同様、会員のノミネートによって候補者を設定し、幹事会が決めた選考委員による合議によって決定する方式が採られた。

会員のノミネートは、当初出足が鈍く心配されたが、三月三一日の締切日前後にどっと殺到し、結果的にはこれまでで最も多い投票数となった。推薦された候補者の総数は延七十名である。

推薦文をたばねて読むと、さすが会員の高い見識で綴られた長文のものが多く読み応えがある。「これを読むと、ラジオ・テレビも捨てたものではないことが良くわかる」というのが、選考委員に共通した感想であった。

選考委員会は四月一二日の午後二時から千代田放送会館四回会議室で行われた。第五回の選考委員は、遠藤利男氏、大原れいこ氏、石井彰氏、林健嗣氏、川口幹夫氏（委員長）の五氏である。

推薦文の厚いコピーを手に緊張した面持ちで席に着いた。大山代表幹事と村木担当幹事がオブザーバーとして立ち会った。

川口委員長の指名により、進行役は村木幹事が勤めたが、自己紹介の後、会はそれぞれの委員が自分が気になった候補者名を数人列挙することから始まった。

全員が琉球放送パーソナリティの上原直彦氏をそのひとりに推していたことから上原氏が入賞候補のトップに躍り出た。

名前が出た数人について、それぞれ意見が出された。

そこで何人かが推薦した故人の扱いについて先に協議することとし、功績の大きかった人については特別賞とは別枠で特別功労賞として会としての敬意を表することが決まり、今年度は、推薦者も多かった久世光彦氏と日下雄一氏の両氏に贈ることが決まった。

次いでグランプリに戻り、さまざまな意見が出されたが、これまで受賞がなかったラジオ関係への初贈賞の意義などを踏まえて上原氏へ贈ることで全員一致した。

続いて次の入賞者へ進み、まず終戦６０年記念のＮＨＫ企画についての評価が議論され、なかでも靖国神社関連番組について高い評価がなされた。２日間の全体にするか第一夜だけにするか、第二夜の三宅アナにしぼるかなど議論されたが、結局第一夜の「ＮＨＫスペシャル」へ贈賞することに決まった。

得票が多かったＮＨＫ音響デザインの小野氏、東北放送の中野氏については異論がなく、すんなりと決まった。最後の一人については意見が別れ複数の候補者の名前が出たが、最終的にはテレビ朝日の五十嵐氏が浮上した。

以上でグランプリ一名、特別賞四名、特別功労賞二名、計七名への贈賞が決まり、選考委員会は予定どおり午後四時解散した。

【受賞理由】

グランプリ・**上原直彦**

（琉球放送・パーソナリティー）

沖縄で最も人気の高いラジオ番組、１９６４年から続いている生番組「民謡で今日拝なびら」（月～金、午後３時～４時）のパーソナリティを４５年間つとめている。旧暦と方言を大事にし、聴取者のリクエストは「はがき」のみでＦＡＸやメールはお断り。

寄せられるはがきは年間３０００通を超えている。

また、上原の提唱で９２年から始まった「さんしんの日」は今年で１４回目、毎年３月４日に沖縄はもとより、北海道、神奈川、長野、大阪からハワイ、ブラジル、シカゴなど世界各地へ拡がって、琉球放送から流れる時報にあわせて三線（さんしん）の合奏が響く壮大なイベントに成長している。

中央集中、番組の画一化が進む中で、地域の人々に愛される番組を作り続けると同時に、沖縄の文化〔ウチナグーチ、三線〕を世界へ発信している上原直彦氏の活動を称え、放送人の会は満腔の敬意を持って第五回グランプリを贈呈する。

特別賞（１）

「ＮＨＫスペシャル・靖国神社～占領下の知られざる攻防～」の制作スタッフ（代表・藤木達弘）

０５年夏〔８月１３日放送〕の終戦６０年記念日の特集企画はタイムリーで考えさせる問題を多く提示していた。アメリカで発見された最新のＧＨＱ資料を検証して靖国神社をめぐる占領下の日米の攻防を描き、戦後の靖国神社のかたちは戦後史の矛盾をはらみつつ、戦前のそれとどのように変わって生き延びたのかを伝えた。

戦争や靖国の実体を知らない世代が増えているなかで、果敢に問題に取り組んだスタッフの姿勢と成果に敬意を表し、また不祥事や時代の激しい動きのなかで公共放送の使命を提示したひとつの試みとして評価したい。

特別賞（２）

五十嵐　文郎

（テレビ朝日・プロデューサー）

流行語となった「熟年離婚」や松本清張原作の「けものみち」、山田太一作の「終りに見た街」、リメイクの「愛と死

をみつめて」など、このところ勢いのあるテレビ朝日ドラマの原動力はすべて五十嵐プロデューサーがチーフでまとめている。

日常の中へテレビドラマの浸透力を広げ、ジャンルの幅を広げ、テレビドラマの魅力を深めた実績を評価した。

特別賞（3）

小野　さおり

（ＮＨＫ・音響デザイナー）

ＮＨＫドキュメンタリーの音響設計のなかで目立つ存在である。「復興～ヒロシマ」、「トラック、時間を追う男たち」、「体いっぱいで原爆を語り継ぐ」など、繊細で鋭敏な感覚が感じられる抜群の音響デザイン力を評価して。また、ＮＨＫで女性初の効果ウーマンとしてなかなか光のあたらない困難な環境の中で健闘した開拓精神に敬意を表して。

特別賞（4）

中野　文恵

（東北放送・ラジオディレクター）

日本のラジオが歴史と最も深くかかわった「玉音放送」に取りくみ、ラジオドキュメンタリー「玉音放送６０年目の夏」を演出し、アナウンサーからディレクターへ転進した第一作で、構成の菊池豊氏らのすぐれた力量も恵まれ、０５芸術祭ラジオ部門大賞を獲得した。

私たちの記憶が、いつのまにか（映画やテレビドラマによって）刷り込まれた玉音放送の姿がその実態とは大きくかけ離れていることを、ひたむきで精力的な取材によって分析、見事に描いた。今後の活躍を期待して。

特別功労賞（1）

故・久世　光彦

（テレビディレクター）

長年にわたりテレビドラマの演出に携わり、「時間ですよ」「寺内貫太郎」などバラエティの要素を取り入れた人気テレビドラマを開拓し、一方独立後は

「向田邦子新春シリーズ」で半ば時代劇となった感のある１９３０年代、４０年代東京の庶民生活を素材に、いわば「歴史に書かれていないもの、繊細なもの、虫の眼でなければみえないもの」を時代の空気感豊かに描いて視聴者の共感を獲得した。作家としても活躍したが、テレビドラマの一ページを創出した才能に敬意を表して。

特別功労賞（2）

故・日下　雄一

（テレビプロデューサー）

８７年に「朝まで生テレビ」を、８９年に「鳥越・畑のザ・スクープ」などをはじめた。「朝まで…」は、タブーなき議論を長時間、生放送で行うという挑戦的なスキームを作り上げ、「ザ・スクープ」は調査報道に徹した番組スタイルを開拓し、もって、テレビ番組の可能性を大きく広げた。両番組ともしばしば危機的状況を迎えたが、日下氏は不屈の闘志と幅広い人柄で緊張を包み込み、乗り越え、番組とスタッフを育てた。その功績に敬意を表して。

【受賞者の言葉】

預かりものを返す

上原直彦

「およそ伝統と名のつくものは、先人たちからの預かりものである。預かりものは持ち主に返さなければならない。その持ち主とは、代替わりはしているが、周辺にいる若者たちなのだよ」

昭和二九年。琉球放送開局以来のラジオ番組「ふるさとの古典」（日曜日朝６時放送）二代目解説者・古典音楽家宮城嗣周氏にかけられた言葉である。因みに、現解説者は、芸能史・風俗史研究家崎間麗進氏（八六歳）。

「預かりもの」を預かった私は今、「返す作業」をしなければならない適齢期にある。今年二月、四五年を迎えた島うた番組「民謡で今日拝なびら」、三月四日に一四回目を終えた「ゆかる日まさる日さんしんの日」も、言ってみれば、県民と共有、共鳴しながら「返す作業」をしているものと心得ている。

このことを成すのにラジオは、最適の

表現媒体と言い切っていい。

沖縄の声、いや、地方の声は、なかなか中央には届かない。しかし、中央からは大河の如くもろもろのモノが流れ込む。ならば、それに押し流されず、同化することなく、沖縄のスタンスをもって放送を持続するのみである。

このたびの賞。また、先人からモノを預かった。これをどう放送現場の後輩に、（返す）か。嬉しい（作業）がひとつ増えた。

にぇーでーびたん　《ありがとうございました》　**（琉球放送・パーソナリティー）**

靖国神社と私

中村直文

正直言いまして取材も編集も大変に難しい番組でした。それだけに、今回このような賞を頂けるということで、スタッフ一同、心底苦労が報われた思いで一杯です。

まだ取材を始めたばかりの頃の話ですが、親戚の一人に「靖国神社の取材をしている」と話をしたところ、「お前のジイさんも靖国に祀られている」という予想もしなかった反応が返ってきました。祖父は陸軍に徴兵され、中国の戦線を転々としていたのですが、戦地で病に倒れ送還されてから亡くなったので、地元の九州に遺骨も墓もあり、よもや遠く離れた靖国に祀られているとは思ってもみなかったのです。祖父が4人の子どもたちに宛てた遺書も地元に残っていました。元銀行員らしい生真面目な文章が筆で綴られていました。

「お父さんは大東亜せんそうに　おぉ國のためにせんししたのだ　おまへたちもお父さんにまけないりっぱな人になっておくれ　お父さんは戦死してもたましひは　かならず天の上から　おまへたちをまもっています」

戦争には必ず相手がいます。戦争には常に両面があるということです。例えば私の祖父は遺族にとっては悼むべき大切な存在でありますが、一方、祖父が軍靴で立ち入った中国の人々にとって、祖父は憎むべき相手の一人だったでしょう。軍人や軍属を祀る靖国神社は、常に戦争の“両面”を背負っているわけで、被害者意識や加害者意識だけで語られるのは一面でしかない、というのが取材を通して感じたことです。

いずれにしても、「靖国神社」の取材で、はからずも自らのルーツを知ることにもなり、戦争の風化というものは、まず個人の中から始まるのだと痛感しています。今後も何らかの形であの「戦争」を伝え続けていきたいと思っています。

（「NHKスペシャル　靖国神社」　制作スタッフ代表）

この賞を励みに

五十嵐文郎

特別賞の言葉のなかに「テレビドラマのジャンルの幅を広げ、テレビドラマの魅力を深めた」というくだりがあり、正直、過分なお褒めと、恥ずかしく思いました。若い人向けの連続ドラマが主流のなか、アマノジャクな気持ちから《他局のやらないことをやりたい》と思っただけでした。

実際のところは、ご一緒に仕事をさせて頂いた諸先輩のクリエイティブな才能に引っ張られて、素晴らしい作品に恵まれた、ここ数年でした。

「終わりに見た街」の作家、山田太一さんが『若い才能だけでなく、年齢を経て素晴らしい才能を発揮する機会を今のテレビ界は奪っている』と話されていたことがありました。

見応えのあるドラマを創りつづけるためにも、ドラマの世界で大きな足跡を残された方々の力をお借りして、今後とも、本当の意味で「ドラマの幅を広げる」仕事をして行きたいと思います。

本当にありがとうございました。**（テレビ朝日・プロデューサー）**

音はペンより強し

小野さおり

『音はペンより強し』。これは私が番組に臨む時、常に自分を戒めるための言葉です。ちょっと聞くとまるで音を過信しているかのように聞こえますが、真意は全く逆で、私達効果マンの表現手段である「音」は、時に番組のコメントを越えて、視聴者の感情に直接訴えかけてしまう力を持っている、だからこそ身を引き締めて、細心にそして大胆に表現していかねばならない、そういう想いをこめた言葉です。

私がこのように考えるようになったきっかけは、十一年前のあの阪神淡路大震災でした。発生直後神戸に入り、焼け野原となった鷹取商店街を前にして、音でこの現実に立ち向かうことなど到底出来ないと呆然と立ちつくしたことを今でも思い出します。そして生半可な音響表現は、時として「暴力」にさえなってしまうということを教えられました。しかし同時にドキュメンタリーの音響効果に携わるということは、この「怖さ」を肝に銘じながら、臆することなく表現する覚悟を持つことだとも教えられました。今でも、「諸刃の剣」の音を手に迷い、悩みながら奮闘の日々は続いています。

音響効果といえば真っ先に思い浮かぶのはドラマや映画ですが、若輩の私がこのような賞をいただきましたことは、歴史の浅いドキュメンタリーの音響効果という世界の中で、今後より一層努力しなさいと温かい叱咤激励をいただいたものと考えております。心より感謝いたします。**（NHK・音響デザイナー）**

教科書に載ってない歴史番組

中野文恵

いいのでしょうか・・・・私などが頂いて・・・。

本当に、恐縮しております。「放送人」と名乗れるほど充分な働きをしているとは、とても言えませんが、「放送好き」として、ノミネートして頂いた事にとても感謝しております。

ラジオドキュメンタリーの制作は、今回が初めてで、それまでは10数年アナウンス部で仕事をしておりました。これまではゼロからというよりは、最後の部分の仕事を担当させて頂いていましたので、初めから最後までこんなに深く番組に関わったのは、初めての体験でした。挫折することの連続でしたが、落ち込んでいる余裕と時間もなかったので、ただただひたすら走り続けていたと思います。

制作したドキュメンタリー番組「玉音放送60年目の夏」は、これまであまり触れられることのなかった玉音放送の実像と謎に迫った番組です。「玉音放送」の謎に迫ることで、見過ごされてきた「日本の大きな課題」を浮き彫りにして、特に若い世代へメッセージを残しています。

また、玉音放送をラジオ80年の歴史の中で最も歴史と深く関わった番組という視点から捉え、玉音放送の前後で、ラジオは時代とともに役割も大きく変わっていくという内容も同時に盛り込まれてます。従来の終戦番組とは違い、随所に時代を象徴する曲や番組が登場しますので、どの世代の方が聞いても自分の時代と重なる音と出会えるのではないかと思います。「教科書に載っていない歴史番組」としてずっと聞き継がれていってほしい・・・そんな思いでした。

もちろん、今回の作品は私一人で制作したわけではありません。初心者の私にドキュメンタリーを一から教えて下さった構成作家の菊池豊氏の存在は大きく、菊池氏のおかげで私の未熟な取材も立派な素材として番組に活かされました。また、不安に思う私を常に励まして頂き、精神的にも支えて頂きました。そして、バランスの悪い音を地道に編集してくれた技術部員の佐藤大樹氏のおかげで、印象的な音の多い番組に仕上がりました。この番組は菊池氏と佐藤氏と取材にご協力頂いた多くの皆さんのおかげで誕生した番組ですので、今回の賞は、私個人ではなく、皆さんを代表して頂いたという思いです。

本物のディレクターになるまでは、まだまだ遠い道のりですが、ディレクターデビューを素晴らしい皆さんと仕事をさせて頂けた事は本当に幸せです。この恵まれたスタートに感謝し、これからも与えられたチャンスに挑戦し続けたいと思っています。（東北放送・ラジオディレクター）

放送人の会　会則

2006年5月19日改定

第1条（名称）本会は、放送人の会という。

第2条（目的）本会は、放送人が組織・地域・世代の違いをこえて交流し啓発しあうとともに、市民との積極的な意見交換を図ることによって、日本の放送文化の継承と発展充実に寄与することを目的とする。

第3条（事業）本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1．放送人の交流と相互啓発、学習

2．放送人の業績と人間性の記録および放送関連団体との提携

3．放送に関心がある人々、および放送関連団体との提携

4．放送番組の創造に顕著な功績をあげた個人の顕彰

5．機関紙、各種出版物などの企画・編集・制作など

6．放送についての研究・検討・討論など各種会合の開催

7．その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条（会員資格）　放送にかかわる人、および放送文化に深い関心を持つ人で、本会の目的に賛同する個人。

第5条（入会）入会希望者は、入会申込書を代表幹事あてに提出し、幹事会の承認を得なければならない。

第6条（入会金及び会費）本会の入会金、年会費は、総会で別に定める。

第7条（退会）会員が退会する場合は、退会届を代表幹事あてに提出しなければならない。

第8条（役員）　本会に次の役員をおく。

1．名誉会長　1名

2．代表幹事　1名

3．幹事　22名以上30名以内

第9条（役員の選任）名誉会長及び幹事は総会でこれを選任し、幹事は互選で代表幹事を定める。必要に応じて副代表幹事をおくことができる。

第10条（幹事の職務）代表幹事は本会の業務を統括し、本会を代表する。

幹事は幹事会を組織してこの会則に定める業務のほか、本会総会の権限に委ねられた事項以外の事項を議決し、執行する。

第11条（役員の任期）本会の役員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条（会計年度）　本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

第13条（幹事会）幹事会は代表幹事が召集する。幹事現在数の3分の1以上から会議に付議する事項を示して幹事会の招集を請求されたときは、その請求があったときから10日以内に臨時幹事会を招集しなければならない。

2．幹事会の議長は代表幹事とする。

3．幹事会のもとに必要な委員会をおき、それぞれの担務を推進する。

各委員会は委員長が招集する。委員長は幹事会に担当業務の進行状況を報告しなければならない。

4．代表幹事は、必要な場合、会計監事を委嘱することができる。

第14条（総会）通常総会は、毎年1回会計年度終了後2カ月以内に代表幹事が召集する。

2．臨時総会は、幹事会が必要と認めたとき、代表幹事が召集する。

3．総会の議長は代表幹事が当たる。

4．総会はこの会則で定めたもののほか、次の事項を議決する。

（ア）事業計画および収支予算に関する事項

（イ）事業報告および収支決算に関する事項

（ウ）その他、本会の業務に関する重要事項で幹事会が必要と認めたもの

5．総会は会員現在数の2分の1以上の者が出席しなければ、その議事を開き議決することができない。ただし、他の会員を代理人として評決を委任した者は出席者とみなす。

第15条（会則の変更）この会則は、幹事会および総会において議決を得れば変更することができる

新体制決まる

名誉会長　川口幹夫
幹事・特別顧問　大山勝美
代表幹事　今野　勉

【幹事】石橋冠、石井清司、伊藤雅浩、大山勝美、荻野慶人、加賀美幸子、各務孝、北村充史、今野勉、斉明寺以玖子、鈴木典之、久野浩平、堀川とんこう、松尾羊一、村木良彦、村上雅通、山田良明、磯村健二、寒河江正、中澤忠正、長沼士朗、山田尚、（以下新幹事）石井彰、金平茂紀、桜井均、西川章、荻野靖乃、林健嗣、坂本良江、山路家子

代表幹事挨拶　今野勉

大山さんの続投を強く望んだのですが、「もう6年もやったので、仕事はやるから肩書きだけはずしてくれ」とのことでこうなりました。

大山さんは「仕事はやる…」ということなので、どの仕事をやって頂くか、分担を決めました。大山さんは日韓中の組織作り、具体的には人集めとお金集めですが、それをやっていただきます。もう一つは新しい会員を増やす、それも若い会員を増やす、それはこの会を次世代につないで行く上での重大な課題ですが、それを大山さんにやっていただく、この二つです。大きく言えば外回りは大山さんにお願いして、僕は内回りというか、これまでやってきたことをそのままやって行きます。

そのままと言っても、この際だからといろんな幹事の方からいろんなご意見を伺いました。そのあらわれが規約の改正で、今や各幹事がそれぞれのプロジェクトで充分自主的に仕事がやれるようになって、幹事会に細かく報告する必要がなくなった、幹事会の回数を減らし各委員会中心で運営して行こうということになりました。月1回の幹事会は隔月で充分だろう、幹事会は大所高所でものを見て、具体的な活動は委員会でやります、ということで規約を改正して、運営を柔軟にやれるようにしました。

委員長とプロジェクトのチーフは決めていますが、委員長、チーフはそれぞれの委員を何名でも任命してもいいとこれまで幹事会で確認しています。委員長、チーフは希望する委員の名前を今月中に事務局届けてください。全幹事がどこかの委員会、プロジェクトチームに入るようにしたいと思います。幹事でない会員を指名してもかまいません。決まり次第発表して、それが新しい体制になりますので、委員長、チーフの方よろしくお願いします。

今までのイベントはわれわれ放送業界の人間と市民をつなぐもの、放送文化を市民に知っていただくものが多かった。足りないものの一つは、現役もOB・OGも放送界に対して言うべきことがあればきちんと言ったほうがいい。放送人として発言すべきだと思ったら、シンポジウムを開く、個人としての発言があれば会報に掲載するなどいろんな方法でやろう、そのためにも会報の発行回数を増やしたい、これが一つです。

もう一つは折角会員になっているのにお互いに会員の顔を知らないということがある。これは交流の場が少ないからです。これまでこの会は市民の方へ顔を向けていろんなイベントをやってきましたが、会員同士のためのイベントがない。たまに別の趣旨で会員同士が会うとこれが実に面白い。会員同志の親睦をぜひ図って行きたいというのが、二つめです。

1、放送文化と市民をつなぐイベント
2、放送人としての発言
3、会員同志の交流

この3つを柱にやって行きますのでよろしくお願いします。

２００５年度（平成１７年度）　会計報告
（2005年4月1日～2006年3月31日）
2006年5月19日　第９回総会承認

1．前年度繰越金	6,095,230
2．2005年度収入	5,430,020
会費（含入会金）	2,110,000
共催事業契約金	3,000,000
イベント関連収入・掲載料	300,000
寄付・利息	20,020
3．2005年度支出	5,855,967
一般管理費	2,539,054
事業費	3,316,913
4．2005年度収支　（1＋2）－3	5,669,283
5．預金・現金残高	5,669,283
普通預金（みずほ赤坂）	1,939,755
郵便振替証書残高	3,707,130
現金	22,398
6．次年度繰越金	5,669,283

[特別会計]
第5回日韓中テレビ制作者フォーラム2005
2005年10月21日～24日、東京・

1収入	20,878,950
民間放送各局協力金（計10局）	7,500,000
助成金（計2件）	2,800,000
企業協賛金（計10企業・団体	10,578,950
2．支出	19,722,100
予備会議等事前経費	889,919
会場費・参加者関連経費	6,258,743
同時通訳・通訳・翻訳	3,588,995
印刷費	3,196,128
運営委嘱費・謝礼	2,363,219
参加作品制作費	1,474,100
記念品・記録・車両交通通信費等	1,950,996
3. 収支差金(次年度繰越)	1,156,850

06放送人グランプリ
会員推薦理由アンソロジー

現場の先輩たちが後輩の業績を推す。いわば放送界の芥川・直木賞を目指すユニークな視点が関心を呼び、今回は昨年の倍以上の推薦がありました。

1．奨励賞　**中野　文憲**（東北放送ラジオ局制作部）　**菊池　豊**（日本放送作家協会員）

ラジオドキュメンタリー「玉音放送50年目の夏」（05芸術祭ラジオ部門大賞）のスタッフ、取材・演出（中野）と構成（菊池）。

中野文憲は昨年4月の人事異動でアナウンサーからディレクターに転身したばかり。初めて制作したドキュメンタリー番組で芸術祭大賞という金的を射落とした。おそらく夢中で制作にあたったと想像するが、ラジオに対するひたむきさがこの作品に反映されたのではないか。これからも意欲的に番組制作に取り組んでくれることを期待して「奨励」を。

菊池豊氏は夫人の実家がある仙台を拠点に活動している。最近、ラジオドキュメンタリーやラジオドラマを書ける作家は稀少になったが、その数少ない作家の一人である。04年民放連ラジオ娯楽部門でドラマ「バスはまだですか」が優秀賞、05年ラジオ教養部門でドキュメンタリー「満州・幻のイーハートブ」優秀賞、第42回ギャラクシー賞でドキュメンタリー「北へ渡ったヒーロー　北朝鮮帰国事業とは何だったのか」がラジオ部門で選奨を受賞、そして今回の芸術祭大賞受賞である。このように菊池氏が構成を担当した番組が常に高い評価を受けている。

地方での放送作家活動は仕事量や経済面でも厳しいはず。その厳しい環境のなかで常に真摯に放送に向き合っている菊池氏に「奨励」を。

2．放送界への貢献・特別賞
故・日下雄一（テレビ朝日、06年1月5日死去）1987年に「朝まで生テレビ」を立ち上げ、タブーなき議論を長時間にわたって生放送で行う　という挑戦的な番組スキームを作り上げ、テレビ番組のスタイルの可能性を大きく広げることに貢献した。

3．テレビの自己批評の大切さを実証しつづけたで賞
「新・調査情報」編集部代表・増井昭太郎（TBSメディア総合研究所）

「新・調査情報」誌は、隔月刊の放送批評誌。健全な放送のあり方を求めて、放送界内外のさまざまな声を編集して、多様なトピックスを提供し続けてきた。

4．批評賞　**桜井　均**（NHK）

「テレビは戦争をどう描いてきたか」（岩波書店）の功績に対して。戦争を描くというジャーナリズムの目的に対して、日本のテレビ人がなし得た最高水準の仕事のひとつ。

5．グランプリ　**神戸　金一**（RKB毎日・報道記者）

これは元・新聞記者で現在RKB毎日放送の報道記者、神戸金一が自分の長男金祐（通称カネヤン）を主人公にした私的なドキュメンタリーである。自閉症の実生活を描いて、その児童を育てることの困難さ、いかにしてこの病に社会の目を向けるか、をカネヤンを中心に、同じ自閉症児の母親たちを通じて説いている。

テレビのルポに私小説の手法を用いて、それが切実に胸を打つ。活字メディアから映像メディアへ移った記者の、調査報道の適切さ、遺漏のなさも快い。この作品はJNN協議会賞受賞後、それをリメークして再放送したもの。前作「蜘蛛の巣城」も同賞を受賞済。

作り手として、いままでにないガッシリした構成力を持つ「遅れてきた新人」である。

6．グランプリ　**森本毅郎と「森本毅郎スタンバイ！」スタッフ一同**（TBSラジオ）

月曜から金曜まで毎朝6時30分から8時20分までの約2時間、朝刊各紙の重要ニュースからスポーツニュースまで、時には「朝刊でほとんど扱っていないが…」と聞き逃せない話題をも教えてくれ、これを聴いて出勤すれば新聞を読む暇がなくても恥をかかないで済むと言ってもいい。

日替わりのコメンターにも見識があり、レポーターが取材する街の人々の声にも親近感を持て、映像に月移りするテレビのニュースに比べ、想像と思考を促すラジオならではのニュースワイドである。

放送開始1990年で既に10年を超えるのを思い、コメンテーターとスタッフの努力を讃えたい。

7．特別賞　**「その時歴史が動いた…」（NHK）のキャスター・松平定知とスタッフ一同**

古今東西の歴史の流れにショックを与えた事件や人物を、成功者ばかりでなくヒトラーや佐々木小次郎など敗者にもスポットを当て、ドラマティクに解りやすく検証し続けるキャスター・の松平定知の情熱とスタッフの労苦を讃えたい。2000年から放送は6年を重ねる。

8．グランプリ　**石高　健次**（朝日放送）

05年5月28日放送の「終わりなき葬列」の制作・演出他。

上記番組は、アスペクト問題について、すべてのメディアの無視、黙殺の中で初めて報道した。また、石綿工場の労働者だけでなく、近隣住民が被害者であることを初めて立証し、行政・世論を大きく動かした。テレビの歴史的な番組になると思われる。

なお、石高氏が、放送で初めて拉致問題を報道し、その後の持続的な報道活動が横田めぐみさん拉致の事実発見につながった。

9．地域活動特別賞　**（有）プリズム代表・岸本晃氏の「住民ディレクター」による活動**

10年あまりにわたる熊本県球磨郡山江村の「住民ディレクター」育成と地域活性化の活動は、本年1月4日放送の熊本放送の報道特番「住民ディレクター発！だんだんなー山江村」の成功でその実績の大きさ、岸本氏の日指す理想のある達成感を証明した。この番組への視聴者の反響の大きさは、放送関係者だけでなく、地域の活性化を考

えるあらゆる人にとって、今後深く検討されるのに値する意味を持っていると考えられる。

10．グランプリ **「プロジェクトX 挑戦者たち」制作グループ**

「プロジェクトX 挑戦者たち」は、2000年3月28日の第一回放送から数えて187回の最終回を2005年12月28日に放送し、およそ6年間に渡る番組歴史に幕を閉じた。

この番組は、図らずも経済不安に怯え、自信を失いがちだった日本人に、かつての栄光をもう一度思い出させ元気を取り戻させる何よりの応援歌となった。また番組の演出面でも、田口トモロウの個性的なナレーション、中島みゆきの歌うテーマソング「地上の星」などが話題を呼び、放送文化の向上にも大きく貢献した。

11．**グランプリ 鄭 秀雄**（チョン スウン） 韓国のドキュメンタリー演出家自分でカメラを担いで取材・撮影し、編集してドキュメンタリー作品をつくりあげる独特のスタイルを持つ韓国のドキュメンタリー演出家。牛山純一を師とする。

韓国では華麗な受賞歴を持つ第一人者で、アジア各国のドキュメンタリストとの親交も多い。日本ではあまり知られていないが、NHK（衛星）でしばしば放送され、来日の機会も多い。06年3月、放送人の会の「人と作品」シリーズにも登場、関係者の危惧を越えて満員の盛況だった。作品は、歴史の襞（ひだ）を描いて深い思考力を誘う、日本ではあまりない作風だが、同時に、思索的で情熱がほとばしる発言と行動は、放送文化基金が各地で主催する「制作者フォーラム」や放送人の会の「中韓日フォーラム」などの場で日本の制作者にも深い刺激を発し続けている。

12．**田中直人**（テレビマンユニオン）**と下田大樹**（NHK）**を代表とする「映像の戦後60年～あなたと作る時代の記録」シリーズの企画・制作スタッフ一同**

国内はもちろん「NYタイムス」にも広告を出すなど、庶民が撮影した映像を幅広く発掘して収集し、「涙」「青春」「働く」「ふるさと」「アメリカ」「子ども」などテーマごとに毎月一回、05年1月から2時間(乃至3時間)作品をNHKで放送。

プロが撮影したニュース映像ではなく、素人の映像で歴史を語るという未曾有の困難に挑戦し、みごとに成功して「放送人」としてのプロ魂を発揮した。

13．特別賞候補 **横山 隆晴**（フジテレビ）

横山氏は53年生まれ、銀行勤務などを経て85年にフジテレビ途中入社し、「白線流し」「小さな留学生」など、異色のドキュメンタリーを創り続けてきた。

05年は、日本で最後に桜が咲く北海道東端の町にカメラマンと、年半にわたって泊り込み、地元の高校へ通って制作した「桜の花の咲く頃に」で、テレビドキュメンタリーの新しい分野を画期的に創出した。

第一回放送文化大賞、民放連盟賞テレビ教養部門最優秀賞など受賞も多いが、最もいい作品を作った人に拍手という観点から特別賞に推薦したい。

14．**小野さおり**（NHK技術センター・音響デザイン専任ディレクター）

NHKでおやっと思う作品に出会うと音響デザインにこの人の名前を見ることが多い。05年の放送文化基金賞のドキュメンタリー部門でNHKは4作品が受賞したが、そのうちの3本、「復興～ヒロシマ」「トラック・時間を追う男たち」「体いっぱいで原爆を語り継ぐ」などの音響デザインを担当した。

桐朋ピアノ科卒で、NHK音響部門へ初めて入った女性と聞く。繊細で鋭敏な感覚が感じられる抜群の音響設計で、ともすれば忘れられがちなこの分野での開拓精神に敬意を表して。

15．**後藤一也**（北海道文化放送ディレクター）

浅草レッサーパンダ帽事件をテーマにした「ある出所者」（民放連連盟賞報道部門優秀賞、「地方の時代」映像祭優秀賞）で、いわゆる「一人称ドキュメンタリー論議」を巻き起こすなど大きな反響を呼んだ。

16．**山里 孫存**（沖縄テレビ・ディレクター）

「むかしむかい この国で」（「05地方の時代」映像祭優秀賞受賞）の成果。06年には民教協スペシャルの企画募集で選抜された沖縄の喜劇人を描いた作品が2月に放送されている。

17．**延江 浩を代表とする「ザ・ライン～僕たちの境界線」**（エフエム東京）**制作スタッフと出演者一同**

韓流ブームと反日のなかで、在日の人々を中心に取材し、日本とアジアの境界線を追うなかで、それは私たちの内部にこそあることを描いた佳作で、ラジオの音とことばの良さ、想像力の深さを実証した。

18．グランプリ **「その時 歴史は動いた」の番組担当者**

NHKは「歴史探訪」以来、歴史番組には多年の蓄積があるせいもあって、常に新資料を発見したり、資料の見直しを行い、とかくマンネリに陥入りやすい歴史番組を血の通ったものとして呈示している。扱うテーマも、政治、経済、文化、芸能、スポーツと多岐にわたり、ジャーナリスティクな目配りを心がけるとともに、手法的にもドキュメンタリーあり、再現ドラマありとエンターテインメント的要素にも配慮しているが、殊更 感動話に仕立てることはせず、常に出典を明示しながら歴史を等身大に伝えようとする姿勢に好感が持てる。

キャスター松平アナの親しみ易い語り口にも助けられ、歴史がイデオロギー的に語られ易い昨今、この番組はいわば解毒剤的効果を発揮しているといえよう。

19．特別賞 **松尾羊一**

身内ぼめとそしられるのを承知の上で再々度松尾さんを特別賞に推薦したい。松尾さんの多年にわたる放送番組に対する親身で内面的な放送批評は云うに及ばず、「放送人の会」会員の数少ない交流、交換の場とも云える会報を読み捨てるには惜しい魅

力的なものにしている編集責任者の力量に対して敬意を表してもいいのではと思いのではあるまいか。

云うまでもないことだが、番組の料理人の存在もその料理を的確に評価して呉れる存在あってこそと思われるので。

20．特別賞　**毒蝮三太夫**

毒蝮三太夫は、TBSラジオで1969年10月のスタート以来、実に38年間になんなんとする長期にわたって、自力で創り上げた独特な〝職場訪問トーク〟というスタイルのラジオ中継番組で活躍している。現在の放送枠は「大沢悠里のゆうゆうワイド」(月～金、08：30～13：00)のなかのコーナーの形をとった「毒蝮三太夫のミュージックプレゼント」(月～金、10：30～10：55)である。

彼はここで主として首都圏のスーパーマーケット、商店、工場などの、職場、を訪問して従業員やお客さんを相手に、毒舌のなかにも温かみのこもったトークを繰り広げる。現在までの訪問先は8000軒を越えた。有名なのはそのざっくばらんな、毒舌。それと裏表をなしている温かみと思いやり。爆笑を呼ぶトークの中に、庶民の生きていく苦しみと楽しみがまぜこぜになって、涙を誘うことさえある。「ジジイ、ババア、身近な人、大事にしろよ！」と肩をどやされる「ババア！」たちが大ファン層なのである。

毒蝮さん談「テレビが表通りだとすると、こっちは横丁。だから普段着で、身の丈でやってきた。それをリスナーは肌で感じ取ってくれてるんじゃないかなあ」

毒蝮三太夫は実質的には彼のこのコーナーのプロデューサーであり、ディレクターでもある。その意味で、マムシさん、は単なるタレントではなく「放送人」のひとりである。

21．グランプリ　**三宅　民夫**（NHKアナウンサー）

NHKスペシャル「日本のこれから」は「格差社会」「人口減少社会」「アジアの中の日本」「知っていますか？若者たちのこと」「どうなる20年後のわが家の家計」と大きなテーマを生放送で問題提起してきました。

三宅アナウンサーは、そのキャスターとして実に素晴らしい役割を果たしていると思います。どのような人の意見でもじっとよく聴いて、共によく考えるその姿は感動的でした。　また、「探検ロマン」では、軽妙な語り口、「功名が辻」では人間味溢れるナレーションで魅了されます。

アナウンサーとしての技量、キャスターとしての実力、功績を高く高く評価したいと思います。(第3回でも「おはよう日本」の長年にわたる名キャスターとして推薦したのですが、未来があるのだからという点で久米宏さんへの贈賞となった経緯があります)

22．特別賞　**中野文憲**（東北放送ラジオ制作部）

「玉音放送60年目の夏」は既に平成18年度の芸術祭賞大賞(ラジオ部門)を受賞していますが、放送人の会としても顕彰したいと思います。

戦後60年の節目に、これまで埋もれていた人材を発掘し、しかも〝今〟という視点から「玉音放送」を多角的にとらえています。「戦争とメディア」という点からも考えさせられる意義深い、優れた番組でした。

23．特別賞　**故・日下雄一**（ANBエグゼブティブプロデューサー）

テレビ界に新しい一ページを開いた「朝まで生テレビ」を1997年から20年間プロデュースした。司会に田原総一朗氏を起用、外添要一氏をはじめ数々の人材を発掘した。

その一方、89年からは「ザ・スクープ」をプロデュース、鳥越俊太郎氏を世に送り出し、硬派の調査報道番組を定着させた。惜しくも2006年1月、満59歳で死亡した。(最後の)放送日は2日後だった。

24．グランプリ　**NHK終戦記念日特集番組**

緊迫した空気がひしひしと感じられ、強い印象が残っています。NHKの番組で、どのような展開になるかという予想もつかない番組進行は初めてではないでしょうか。この決断と実行されたスタッフ・司会の方に敬意を表してグランプリに推薦いたします。

25．特別賞　**故・日下雄一氏**　テレビ朝日の「朝まで生テレビ」のプロデューサー

この番組が自社・他社の番組作りにに及ぼした影響は見逃せません。

26．特別賞　**故・日下雄一**（06年1月逝去）

故人ですが、「朝まで生テレビ」を立ち上げ、テレビの討論に新しい世界を切り開いた。

最近はともかく、当初はテレビではタブーとされた「テーマ」にも挑戦したことはテレビ人として賞賛すべきこと。

27．奨励賞　**「鉄腕DASH！」**（日本テレビ）**の「DASH村コーナー」のスタッフ、出演者一同**

アイドルタレント（TOKIO）を起用したチャレンジ番組だったが、開始後しばらく経って生まれた「DASH村コーナー」は、自然と農、村、手作り生活を、日本人の昔から持っていた生活を今の若者に実際に体験させ、番組の人気コーナーにし、若者にいいメッセージを伝え続けている。地元の協力者も加えて賞を贈ってもいいのではないか。

28．特別賞　**故・久世光彦**

同氏は長年にわたりテレビドラマ作品の演出にたずさわり、東京放送（TBS）在職中のレギュラードラマにおいて成果を挙げ、退社・独立後も向田邦子氏原作のテレビドラマ「新春シリーズ」で1930年代、40年代東京の庶民生活を題材として、いわば「歴史に書かれていないもの、繊細なもの、虫の眼でなければ見えないもの」を対象に、「時代の空気」を描いて視聴者の共感を獲得しました。

このため、逝去にあたり「特別賞」を贈りたく、推薦いたします。

なお3月27日付け朝日新聞「短歌欄」

に塩尻在住の百瀬茂名で次の短歌が投稿されていますのでご紹介いたします。

割烹着、縁側、番傘消えていき
後追う如く　久世さん逝けり

29．グランプリ　**「ペット大集合！ポチたま」**

ラブラドール　レトリーバの旅犬まさお君が、日本全国のおもしろペットを訪ねるという設定がユニーク。子どもから大人まで家族皆が楽しめる番組。さまざまなペットの芸やくせを紹介。時にはミニドキュメンタリー風の話題も入る。

捨て犬が小学校で飼われて元気に成長したり、過疎の村でお年寄りの支えとなる犬の話など、動物と人間の交流にホロリとさせられることも。ペットブーム、ペットが癒しという風潮に納得。

30．特別賞　**故・久世光彦**

演出家・小説家としてすぐれた作品を多く送り出した。この3月の急逝を悼んで。

31．特別賞　**国谷裕子**

長年、「クローズアップ現代」のキャスターとして様々なテーマをわかりやすくかつ鋭い切り取りで解説

32．特別賞　**武田真一**

ニュースアナウンサーとして常に好感のある放送を出し、又、地震や事故など突発的な場面でも的確な対応をしている。

33．グランプリ　**NHK終戦60周年特別企画シリーズの制作スタッフのみなさん**

昨年夏のNHK終戦60周年のスペシャル・シリーズは圧巻でした。特に靖国、憲法に関した番組は新しい視点が多々あり、教えられることがありました。

34．特別賞　**故・日下雄一**（テレビ朝日プロデューサー）

85年以降、「朝まで生テレビ」「筑紫・畑ザスクープ」など、右翼左翼を問わず、それまでほとんどタブー視されていたような分野にまで放送番組の枠を拡げ、放送の可能性を開拓し続けました。番組は常に緊張関係と危機的状況を持ちましたが、日下さんは今年の1月、ガンで逝去されました。最後まで現場にいてプロデューサーであり続けた方でした。日下さんに特別賞を贈っては如何でしょうか。

35．グランプリ　**三宅民夫**（NHKアナウンサー）

新しい市民参加的番組・徹底生討論「日本のこれから」司会者として新生NHKのトップランナー役を果たしている意欲と成果～篤実な人柄が・語り口が信頼をかち得ている～を顕彰したい。（「格差社会」「人口減少社会」「アジアのなかの日本」「若者」「増税」柔軟・温和な話術は「おはよう日本」キャスター7年の実績が示すように、お茶の間には広く受け入れられてきた。現に、「探検ロマン世界遺産」ナレーターとして、更に大河ドラマ「功名ケ辻」のナレーターが戦国ホームドラマのナビゲーター役で好評の一因をなしていることも併せて、グランプリ2006にふさわしいと考えた。

36．特別賞　**中野文恵**（東北放送）

05年度芸術祭ラジオ部門大賞受賞ドキュメンタリー「玉音放送60年目の夏」の制作・取材者。ラジオが歴史を動かした事件を地道に検証した優れたドキュメンタリーで放送開始80年にまことに意義深い作品だった。地方のジャーナリスト放送者を顕彰したい。

37．敢闘賞または技能賞　**吉川邦夫**（NHKドラマディレクター）

「名探偵。赤富士鷹」の演出は、センス溢れる映像美と高いエンターティンメント性で目を見張らせた。大河「新撰組」でも才気は証明済み。新進の域を超えた。

38．特別賞　**遊川和彦**

「女王の教室」「広島20年8月6日」の脚本に対して。

39．特別賞　**川野　楠巳**（NHK契約ディレクター・75歳）

1930年東京生まれ。1963年NHK入局・1990年NHK退職、以後、契約ディレクターとしてラジオの「視覚障害者の皆さんへ（旧「盲人の時間」、ラジオ深夜便「心の時代」を担当して今日に至る。

NHK入局以来、「ここに生きる」「名人に聞く」「などラジオ・ドキュメンタリーひと筋に仕事をした。

また、「盲人の時間」（現「視覚障害者のみなさんへ」を35年間担当した。

1971年、新潟県の瞽女小林ハルさんのラジオドキュメンタリー「私とハルばあさん」で芸術祭大賞を受賞した。（2005年から現在）現在は主に「ラジオ深夜便・こころの時間」を担当。

2005年には、視覚障害者と馬の触れ合いを仕事にしている山下泰三の「馬の日を借りて」、不登校の子ども達を雇い、自立に力を貸す埼玉県の工務店社会長白川好光を取り上げた「私の小さな天職」など6本を制作した。

また、瞽女の小林ハルさんは昨年4月、105歳で亡くなったが、1975年頃から30年間、小林さんを年に1～2回訪ねて取材を重ね、昨年12月NHK出版から「最後の瞽女小林ハル・光を求めた105歳」を出版した。

今年も「こころの時代」を制作し続けているが、視覚障害者を中心に社会の弱者に寄り添って番組づくりを続ける川野さんのラジオディレクター人生を表彰したい。

40．グランプリ　**NHKの終戦60年企画　靖国問題の番組制作チーム**

NHKは2005年8月13日と14日に終戦60年企画として、総理大臣の参拝をめぐり国内外に大きな反響を呼んでいる靖国問題について2本の特集番組を放送した。

①NHKスペシャル・靖国神社～占領下の知られざる攻防～（58分）

アメリカで発見された最新のGHQ資料を中心に、占領下の日米の攻防を描き、

戦後の靖国神社は戦前とどのような点が変わって生きのびたかを伝えた（ＣＰ藤木達弘、ＰＤ中村直文）

②ＮＨＫスペシャル・戦後６０年　靖国問題を考える（１４５分）

ＶＴＲ構成と有識者による討論で構成。

ＶＴＲ構成では、戦後の靖国神社における戦没者の合祀と国の関わり、エー級戦犯が合祀されることになった経緯などを伝え、靖国問題の背景には、東京裁判を国内外で違う解釈に使い分けた戦後史の矛盾があることを明らかにした。（総合司会・五十嵐公利、ＣＰ山崎健治、ＰＤ東野真）

（推薦理由）

戦後６０年、靖国問題についてほとんど知らない世代が増えている中で、この問題がかつての戦争と深く関わった問題であることを明らかにした意義は大きい。

さらにＮＨＫ自身の不祥事や、放送と通信の融合が進もうとするなかで、公共放送のあり方が問われているとき、この番組は時の政治的な問題を中立的な立場から、視聴者に多角的に伝えようとする公共放送の立場を具体的に示す取り組みとして評価できる。公共放送に関わる評価という立場から、特別賞でもいいのかも知れない。

４１．グランプリ　**鄭　秀雄**

１．日韓友好の絆を協力に推進しているそのパワー

２．歴史を直視して描くチョン　スウンさんの作品

３．私は「宇宙人」とおどける大きな人柄の魅力に

４２．奨励賞　**「報道ステーション」**（テレビ朝日）**と古館キャスターグループ**

批評性が感じられる。

４３．奨励賞　**「みのもんたの朝ズバッ！」**（ＴＢＳ）

４４．特別賞　**山根基世・はな司会の「日曜美術館」**（ＮＨＫ３チャンネル）

４５．特別賞　**森本毅郎のラジオ番組「毅郎スタンバイ」**

批評性が感じられる。

４６．グランプリ　**桜井均**（ＮＨＫエグゼクティブプロデューサー）

「テレビは戦争を描いてきたか」の著作刊行に対して。

現在のテレビジャーナリズムに対する危機意識。この国のジャーナリストや言論機関を自らが監視機関になることにシニシズムが覆っているように見える。このような状況に対して、学者や評論家ではなく、自らもテレビドキュメンタリー第一線のディレクター・プロデューサーとして生きてきた体験をベースにした知的格闘の書である。

４７．４８．グランプリ　**菅延浩**（テレビマンユニオン）**菅野高至**（ＮＨＫ）どちらかひとり

重延　浩は、昨年は「ヴァザーリの回廊」、今年は「ゲーテのイタリア紀行」と国際的な規模の重厚企画に挑み、教養性、芸術性の高い良質な番組を（ＢＳ用に）作って瞠目させると共に、テレビのコンテンツ開発に独自の新提言を続ける意欲的な理念と指導性に対して

菅野高至は、「秋太刀馬の骨」「慶次郎縁側日記２」など、昨年の「蝉しぐれ」他に続く意欲的で新鮮な本格的時代劇をプロデュースし続けるタフな姿勢は、曖昧で混迷著しいＮＨＫの硬直化の中で、番組のクリエーターとして光る。

４９．特別賞　**故・久世光彦**（カノックス代表、先般逝去）

バラエティ・ホームドラマを開拓した新鮮なテレビ感覚と、「向田邦子ドラマシリーズ」で昭和前期の時代性と家族像を郷愁と文学的香気たっぷりに刻印し続けた功績。

５０．奨励賞　上記グランプリ候補（重延、菅野）が選にもれた場合、奨励賞で評価したい。

５１．奨励賞　**若泉　久朗**（ＮＨＫプロデューサー）

ドラマ「クライマーズ・ハイ」の制作統括に対して。新聞記者の良心と山男のロマンを日航事故報道現場の極限状況の中で鮮烈にドラマ化した意欲を買う。

５２．奨励賞　**磯山　晶**（ＴＢＳドラマプロデューサー）

新感覚ドラマ「タイガー＆ドラゴン」のプロデュースに対して。「池袋ウエストパーク」以来一貫して（以下ＦＡＸ判読不能）

５３．グランプリ　**佐々木卓・戸田郁夫・筑紫哲也と「戦後６０年ヒロシマ悲しみと愛の歴史ミステリー」制作チーム**

６０年前の８月、その時ヒロシマで何が起きたのか、なぜ原爆投下を止めることができなかったのか、ＢＢＣ制作の人型ドキュドラ「ＨＩＲＯＳＨＩＭＡ」とコラボレートして、新事実・新証言をつづった大型企画。視聴率的にも、営業的にも渋い結果が予想される中で、メディアとしての責任だと６０年目の節目の年に堂々と長時間の長丁ものを中国放送とともに、原爆投下の関係者たちの証言、ＢＢＣのすぐれた再現記録、詳しくはなにも知らなかった被害者の孫が筑紫哲也の案内で広島の悲劇の実際に新しい資料と取材を加えてつくりあげ、芸術祭テレビ部門大賞を受賞した。ともすればジャーナリズム検証が見失いがちと言われかねない状況の中で毅然としてテレビ人の使命を果たしたことに対して。

５４．特別賞　**五十嵐文郎**（テレビ朝日ドラマチーフプロデューサー）

このところテレビ朝日ドラマは勢いがある。その原動力となっているのが五十嵐だ。流行語となった「熟年離婚」、松本清張の「けものみち」、山田太一「終りに見た街」、リメイクの「愛と死をみつめて」の話題作・問題作はすべて彼がチーフでまとめている。

５５．特別賞　**中野文恵**（東北放送ラジオ局制作部参事）

ラジオが歴史と深くかかわった番組として終戦時の「玉音放送」がある。玉音放送がどのように発案され、録音され、放送にこぎつけ、日本人にどのように伝わったかを生証人の証言を交えて立体的に取材した番組「玉音放送６０年目の夏」で芸術祭ラ

ジオ大賞を受賞した。アナウンサーから転進して一作目の、心のこもったドキュメンタリーをつくったことに対して。

56．特別賞　**後藤一也**（北海道文化放送報道部ディレクター）

後藤は新聞人からアメリカ誌派遣を経てテレビへ入った。そのジャーナリスト魂は腰が入っており、「ある出所者の軌跡～浅草レッサーパンダ事件の深層～」（05年6月5日）で、軽度の知的障害者が刑務所から社会復帰して果たせない様子を同行取材し、軽度の知的障害者への無理解や、手を差しのべる力があれば救われるとの力強い主張を持ったドキュメンタリーをつくった。ギャラクシー賞、「地方の時代」映像祭優秀賞、FNNドキュメント大賞も受賞している。

57．グランプリ　**上原　直彦**（琉球放送パーソナリティ）

琉球放送に1964年から45年間も続いている生ワイド番組がある。上原直彦がパーソナリティを担当する「民謡で今日拝なびら」だ。放送時間は月～金、午後3時～4時、沖縄で最も人気の高いラジオ番組。ちょっと番組のオープニングを聴いてみよう。

「ハイサイ　チュウカナビラ。ニングワチヌ　ヌ　ナノカ　ウンマノーヒ」翻訳すると、「お元気ですか、こんにちは。今日は旧暦で2月7日、馬の日」この番組では番組のほとんどがウチナーグチで放送されている。

また、旧暦を大事にしながら、聴取者のリクエスト葉書のみで（FAX、メールは不可）沖縄民謡をかける。番組への葉書は年間3000通を越える。

また、上原の提唱で92年から始まった「さんしんの日」は今年で14回目、毎年3月4日に沖縄はもとより、北海道、神奈川、長野、大阪からブラジル、ハワイ・シカゴなど世界各地で、琉球放送から流れる正時の時報に合わせて三線（さんしん）の合奏が響く、壮大なイベントに成長している。

「放送の中にローカルがない方がおかしい。民芸研究家の柳宗悦さんの言葉『地方人は地方の言葉で語った時、真の自由がある』を肝に銘じながら放送を続けている」と上原は語る。

上原はもとからウチナーグチを話せたわけではない・沖縄各地、宮古島、八重山諸島などの方言も消えかけていた琉球民謡を採取する旅のなかで、唄者に聞いて覚えていった。（沖縄、宮古島、八重山諸島はまったく言葉が違います）

中央への一極集中、番組の画一化が進む中で、地域の人に愛される番組を作り続けるだけでなく、忘れられていた沖縄の文化（ウチナグーチ、三線）を世界へ発信している上原の功績は、まさに放送人のグランプリにふさわしい。

上原は1938年那覇市生まれ。高校卒業後、琉球新報記者を経て琉球放送入社。報道部、ラジオ兼テレビディレクターを7年担当した後、アナウンサー&プロデューサーとして数多くの番組に携わる。98年退職後も人気番組「民謡で今日拝なびら」「ふるさとの古典」他の番組制作、パーソナリティを続けている。

58．ラジオ新人賞　**中原文恵**（東北放送ディレクター）

昨年放送されたラジオ番組の中で、最も優れたドキュメンタリー番組を演出したのが東北放送の中野文恵だ。番組はTBCラジオドキュメンタリー「玉音放送60年目の夏」（05年8月15日　構成は菊池豊）。

玉音放送は劣悪な放送環境と「終戦の詔書」がなじみのない漢文調によって書かれていたため、実はその場で敗戦を理解できない人も多かった。日本人の多くには「堪へ難キヲ堪へ、忍ビ難キヲ忍ビ」の一節だけが記憶されているが、4分37秒の詔書全文を現代語訳で紹介したことも評価したい。放送80年の歴史の中で、最大の事件ともいえる玉音放送の実情と、放送の舞台裏を描いた番組は、ラジオ制作者ならではの使命を感じさせる渾身の力作だった。

アナウンサーから制作者に移動になったばかりの若い制作者である中野が、玉音放送に新しい光をあてたことは、特筆に価する。

（59）**大野　了と「あの日　昭和20年の記憶」**（NHK）**の制作スタッフ**

戦後60年記念の数あるテレビ番組の中で、日本史の特異年といえる「昭和20年」の365日を著名人の記憶の証言と各種の記録による「日録」の形で、毎日放送しつづけたこのBS企画は、テレビの時代記録の役割として出色のものであった。

企画のねらいは、戦争の実感を持たぬ世代が大半を占める中で、戦争の時代の生き証人が高齢化し、生存者も減ることに危機感を持ったことから始まる。元日から大晦日までの毎日、その60年前の新聞記事を有名人の日記（山田風太郎、永井荷風ほか）、それに内外の映像記録から探し求めて構成した。

証言者に選んだ著名人は200人にのぼり、当時は青少年や無名の庶民であった人が多く、原爆や終戦の日に限らず、大空襲の体験や肉親の死、前線の学徒兵の恐怖など息詰まるほどの証言が集まった。

また、終戦を境にして、死の覚悟が生きる希望に急変した日本の劇的な日々が鮮やかに再現されるなど、有名人の口から出る知られざる追憶の記憶は、日本人のテレビ遺言集ともなる作品となった。

注目したいのは、取材グループが、NHKBS班と（株）東京ビデオセンターののべ40名による合作であり、全員20代から40代の戦後派のスタッフにとって、初めて知る戦争実体験の証言は強烈であったようで、人選や取材に一年間熱中したことが地道ながらも丹念に出来上がったこの年間企画を支えたことである。

（60）グランプリ　**大脇三千代**（中京テレビ報道部プロデューサー・ディレクター）

以前から「NNNドキュメント」（日本テレビ系）などで、その実力は知られていたが、特に04年の「見過されたシグナル」、05年度の「郵便兵と絵手紙」ですぐれた構成・分析力を示した。地域で地味なドキュメンタリーづくりに励む女性制作者をなるべく多く推したいと思っている。

（６１）グランプリ　**桜井　均**（ＮＨＫエグゼクティブプロデューサー）

業績をあげるまでもない。ＮＨＫの看板制作者の一人だが、０５年度のプロデュース作品「アフリカ・ゼロ年」（４回シリーズ）、「ＺＯＮＥ・核と人間」を高く評価したい。

（６２）グランプリ　**若泉　久朗**（ＮＨＫドラマ班・制作統括）

ドラマ「クライマーズ・ハイ」（０５年１２月９，１７日）のチーフプロデューサー

若泉氏は、長年ドラマ演出に携わり、ドラマ「青い花火」ですでに芸術作品賞（９８）の大賞を得ているベテラン演出家。ドラマの中に常に不条理感を漂わせ、歪んだ人間関係を単なる社会派型の域を超えた映像表現で特色を持つ演出家である。

ドラマは、１９８５年８月１２日の日航ジャンボ機墜落事件を報道する地元地方紙の記者たちの現場をみすえ、ドキュメンタルなタッチで描いた集団ドラマ。単に正義派記者の活躍といったパターンではなく、中央の新聞に追われる地方紙の立場、新聞記者のそれぞれの人間像をきめこまかに描き、ともすれば抜いた抜かれたの事件本位の紙面づくりに対するいわばメディア批判の目で見つめた骨太な長編ドラマであった。

物語は、かつて部下を仕事で死なせ、責任をとり、いまでは遊軍記者に甘んじている記者（佐藤浩市）が日航機事件の全権キャップにされるところからはじまる。当日彼は同僚と谷川岳登頂する予定だった。題名のクラマーズ・ハイとは登山中に死と背中合わせのクライミング特有の興奮状態が極限状態まで達し、恐怖感が一瞬麻痺するが、醒めたときに恐怖が襲ってくることをいう。

その感情が新聞記者にもあって、大事件の紙面づくりに狂奔する現場の興奮状態にマスコミのもつ現在性を暗示した構成が見事である。原作が地方紙記者時代の経験（上毛新聞）を元にしただけあって、絵空事でないこと、固有名詞も実在のものにし、編集現場にみる興奮と高揚感の混乱の中で、マスコミとはなにかを考えさせるドラマに仕上がっている。０５年最高のドラマとして推薦したい。

６３．グランプリ　**寺尾　隆**（南海放送　報道制作センター

ドキュメンタリー「くもり　ときどき、晴れ」の制作に対して

寺尾は前作の「くまがい草」で民放賞を受賞したが、ローカル局の並み居るドキュメンタリストの中にあって優れた描写派として知られる。地元の素材を丹念に掘り起こし、ストーリー性を持った市井の物語として描く手腕は定評がある。

四国は今治市のはずれにある寂れた猟師町のはずれ。やっと車が通れるほどの狭い路地がある。お好み焼き屋「昌万」のオバちゃんが主役だ。お好み焼き屋に三々五々老いた老人たちがやってくる。子どもたちは成人して都会へ出てしまう。残された老人たち常連のいわばサロンがこの店だ。猫に囲まれて暮らす老婆、寝たきりの百歳になった舅を看取る老婦人、ダンディを気取る９０歳の男などなど彼らの他愛ないおしゃべりが店主のオバさんを中心にはじまる。近所のご縁でつながる過疎の猟師町の路地裏の営みが、たくまずして切ない「人情喜劇」の一幕芝居ふうに浮かんでくる。

しかし、老人たちのお喋りから深刻な老人問題が顔を出す。引き取りにきた娘に、離れるのが嫌だとダダをこねる老人。過疎の町の現実がじわじわと描かれる。余生の晩年を明るい諦念で生きる人々を、非情にして暖かいカメラが定点観測風に描く。

べつにドラマを意識しているわけでもないが、ここにはドラマでは描けない描写力がある。ちなみにギャラクシー賞の対象にもなっている作品。

６４．特別賞　**ラジオ番組「すたンバイ！」**（ＴＢＳ）**スタッフ**

テレビ・ラジオを通じて、これほどジャーナルでエンターシップに満ちたものはない。

項目主義のニュースワイドではないといっていい。（９１年から始め、１５年を迎える。森本毅郎キャスターの精緻な解説、ウイットに富んだやりとり、６：３０～８：３０の２時間を通したワイド構成の流れは「聴く新聞」に近い。

コーナーは「朝刊読み比べ」、「ニュースズームアップ」（主な項目のコメンティターとの掘りドげ）、「現場にアタック」（９：５４分、女性レポーター取材による社会戯評）、「全国８時」（蔦信彦、荒川洋治、水谷肇、月尾嘉男、小沢遼子など日替わりゲストによる対談、新刊書、スポーツ、映画などの目配りなど）。ＮＨＫの「主語のないワイド報道」や、みのもんたの「パフォーマンス報道」で信頼を欠く番組が多い中で、成功法で進める現場感覚に満ちた番組、編集感覚を買う。

６５．特別賞　**関口知宏**　「最長片道切符の旅」（０４年５月～６月）、「乗りつくしの旅」（０５年３～４月　春編、９～１０月秋編）、を経て、「土曜特集・列島横断　鉄道乗りつくしの旅」

ここではＪＲ全線２００００キロ走破の最終ゴール駅根室を目指して総集編として送るもの。従来の旅番組がグルメ、温泉のタレント旅だったが、ここでは鉄道ファンなら（四国８８ケ所巡礼踏破同様に）誰しもがやってみたい企画である。といってフィックスできるタレントがいない。

関口は、ひょうひょうとしたキャラで、絵心もあり、作曲家、シンガーであることを生かし、不思議なメルヘン調な旅が完成した。

ほのぼのとした番組は、いまの世では貴重。「遠くへ行きたい」のティストを継承したユニークな旅番組を目一杯表現した点を買う。

６６．グランプリ　**小田　昭太郎**（オルタスジャパン代表）

日本テレビ在職中、ドキュメンタリー番組で多くの佳作を制作・演出し、テレビ民放界では数少ない日本のテレビドキュメンタリー定枠を守り続けてきた。また、その枠から問題作を多く世に送り出し、孤塁とも思えたドキュメンタリー枠健在を示し続けた。

日本テレビ退職後、制作会社オルタスジャパンを設立し、日本テレビ時代のパートナー星野敏子と共に、ドキュメンタリー分

野を継続させ、NHK、民放局を舞台に硬軟幅の広いテレビドキュメンタリー作品でその分野に厚みを導き入れた。30余年に及ぶ　一貫したその活動と情熱を一度きちっと賞賛したい。

ちなみに、97年、カンボジア難民を取材した「故郷は戦火の中に」は民放連最優秀賞、各地の大黒柱を取材したNHK土曜特集の「大黒柱物語」（10分）40本を制作し、97年の「放送総局長賞」を受賞している。「課外授業ようこそ先輩」も多く製作し、大石芳野、橋口譲二などを登壇させている。フジの「ノンフィックス」枠では「ロックで時代を撃て」「ハーレム125丁目の夏」「ジョン・レノンへの手紙」など。ロックシーンから時代を問うたもの。

その他、世界での戦争、紛争、韓国、中国などアジアでの事件を追ったものも多い。全国民放局の開局記念番組を多く制作しているのも特徴のひとつだろう。

67．グランプリ　**桜井　均**（NHK）

揺れるNHKを報道・ドキュメンタリー番組制作で支えている。最も中枢にいるエクゼグティブ・プロデューサー（NHKスペシャル番組センター）のひとり。1946年生まれで10月で60歳。革新的姿勢は一貫しており、公平、公正ではぶれはない。

05年に大著「テレビは戦争をどう描いてきたか」（岩波書店）をまとめ、NHKだけでなく放送界全体としていま最も必要とされる人物人材である。徹底的に妥協を排する姿勢で一貫しており、孤立も恐れていない。今われわれが共に有ることをメッセージすることは、時期的に更に彼を鼓舞するようになるだろう。テレビ史的な視点で彼をちゃんと位置づけておきたい。全3集、4集の大型企画が続いている。92年の「東京裁判への道」は放送文化基金大賞、ほか受賞も多い

68．グランプリ　**森　達也**（映画・テレビドキュメンタリー作家）

「ドキュメンタリーは嘘をつかない」の著作出版（草思社）と放映（テレビ東京06年3月26日）などの制作活動。

従来の著作、テレビドキュメンタリー活動をかかえ、テレビメディアに新鮮な視点での批評、提案活動は、従来のテレビに対する内外の定着しかけていた既成の概念を根底から強く揺さぶり続け、ひとつの文化活動となった。それら総合しての評価。

69．新人向けの取材ディレクター賞などで　**耿昕**（こうきん　福井テレビ・ディレクター）

05年福井テレビ制作のドキュメンタリー作品「有紗と私　それぞれの壁～日本に嫁いだ中国人を追って」の取材ディレクター。（ディレクターは同局・畑裕一郎）

耿昕葉、1975年北京生まれ。高校卒業後日本へ私費留学。大阪に住み日本語学校へ飛び込んだ。1年、成績良好。大都会大阪を避け、福井県立大学経済学部へ入学、4年で卒業。福井市内には中国人妻も多く、知人も増えた。別の年へ移住も試み、神戸大学経済学部へ学士入学、2年。福井で在学中、NHK福井放送局でニュースなどのアルバイトをしていて、マスコミを志望した。福井テレビへ嘱託入社。土曜10時～11時「ザ・タイムリー福井」（トーク番組）でAD。すべてをやった。福井市をはじめ、日本へきて結婚している中国人女性の問題をドキュメンタリー番組化。

「彼女たちはなぜ、日本まできて日本人男性と結婚するのか―」と迫った。トラック運転手の夫と結婚した有紗（杜国鳳）と娘・沙織の3人暮らしの実際を見る。

結婚3年目で離婚した周敏英。中国人である自分を問いながら、自分ではわからない日中問題をまとめた。その取材、レポート、カメラ、など中国人ディレクターとしての可能性を示した。これからが期待される〝日中〟の分野への挑戦の励みとしてとしての新人レポーター賞といったもので報いては如何だろうか。

70．特別賞　**長嶋　甲兵**（テレコムスタッフ・ディレクター）

05年フジテレビの憲法五作品シリーズのひとつ「憲法改定」問題を街頭で一般の人の意見を聞き、そのなかから番組への参加をうながし、専門2名と合宿討論を作品に仕上げました。同時性の強いビビッドな作品になり、彼のドキュメンタリー作家の秀れた資質と柔軟につつんだ強靭な秀れた理念性を明確に示しました。まだまだ新人の域から中堅への大事な時期、そんなニュアンスの賞をこの際贈っては如何でしょうか。

放送人グランプリ受賞者一覧

第1回（02年）

グランプリ＝**曽根英二**（山陽放送）

特別賞＝**故・萩本晴彦**（テレビマン・ユニオン）、**石橋冠**（テレビ演出家）

特別功労賞＝**梅棹忠夫**

第2回（03年）

グランプリ＝**杉田成道と「北の国から」**（フジテレビ）**の制作スタッフ**

特別賞＝**村上雅道**（熊本放送）、**石高健次**（朝日放送）、**岡崎栄**（元NHK）

第3回

グランプリ＝**久米宏と「ニュースステーション」**（テレビ朝日とオフィストゥーワン）

特別賞＝**坂上浩子と「にほんごであそぼ」**（NHK）**制作スタッフ、野中章弘とアジアプレス・インターナショナル、赤井朱美**（石川テレビ）、**和田行と「白い巨塔」**（フジテレビ）**制作スタッフ**

第4回

グランプリ＝**「あなたまた戦争ですよ」**（山形放送）**五十嵐重明、大沼潤ほか制作スタッフ**

特別賞＝**鶴橋康夫**（テレビ演出家）、**杉浦圭子**（NHKアナウンサー）、**金平茂紀**（TBS報道局）、**「陶山賢治の時の風」**（南日本放送）**スタッフ（代表・陶山賢治）**

韓国・中国 放送現場入門

日韓中テレビ制作者フォーラムが定例化して、放送人の会は韓国、中国の放送人と深く関わることになった。しかし韓国、中国の放送の現場については知らないこと、分からないことが多い。理解の手始めに、韓国、中国の放送現場の言葉などを、昨年のフォーラムで通訳をつとめてくれた上智大学の学生、金廷恩（キム・ジョンウン）さんと莫广瑩（モウ・コウエイ）さんに教わった。

Q「リハーサル」、「本番」は何と言いますか？

莫 中国語でリハーサルは「采排（ツァイパイ）」、本番はスタジオ生なら「実拍」、録画なら「実录（録）」、「はい！ホンバン」の意味なら「開始！」です。

金 韓国の現場には日本の影響が強く残っています。「ホンバン」「リハーサル」はそのままの発音で使われますが、実際の「ホンバン！」ではなく、打ち合わせの時「ホンバンではこうやってください」などと使われます。「はい！ホンバン」の意味なら「ドウロカムニダ（入ります）」と言います。リハーサルはそのままですが、最近のスタジオドラマの現場では台本の出来上がりが遅く、いつもぎりぎりでいきなりホンバン。リハーサルという言葉はあまり使われないそうです。

Q 他に使われている日本語がありますか？

金 スタジオでカメラの映像に入ってはいけないものが入って見えてしまった時「バレタ」と言います。リハーサルの時、俳優の演技が気に入ると「そのカンジで」と「感じ」がそのまま使われています。「ドキュメンタリー」「トレンディードラマ」などの英語もそのままです。

Q 動作はどうでしょう？もっと速くの時は手をぐるぐる廻し、もっとゆっくりと時は手を左右にゆっくり餅を伸ばすように引っ張るのが日本の放送現場の合図ですが…

莫、金 全く同じです。

Q カメラの「寄り」や「引き」はどう言いますか？

莫 寄りは「推」、引きは「拉」です。寄りから引きまでのそれぞれを「特写（クローズアップ）」「近景」「中景」「遠景」「全景」と言います。

それから、日本ではプロデューサー、ディレクターその他役割がこまかく分かれて仕事をしていますが、中国ではカメラ割りでも何でも一人で全部やって番組を作る人が多いようです。そうやって思い通りの番組を作りたいと考えます。ですから分かれている役割や担当の言葉がありません。

Q 「カメラ割り」は中国語では？

莫 「分鏡頭」です。「鏡頭」が「レンズ」そして「シーン」を意味します。

金 韓国ではプロデューサー、ディレクターなどの役割は分かれています。

Q 鄭秀雄さんは一人でプロデューサー、カメラマン、編集そして番組のセールスまでなさってますね。

金 韓国でも稀有の方です。

Q 中国の番組制作の仕組みはどんどん変わっているようですが…。

莫 プロダクションが番組を作って全国の放送局に北京、上海、四川省などの見本市などを通して販売していますが、自由化で大儲けをしているところもあります。お笑い系の番組が儲かります。

Q 吉本興業のような企業ですね。

莫 そうです。　（以下次号）

鵠沼海岸から 20

名誉会長　川口幹夫

四月二八日。成田からの電話。

「モシモシ、わたし。大成功でした。みんな元気で帰ってきました！」

札幌こどもミュージカルの細川真理子さんからである。

「よかった！ご苦労さん！皆さんによろしく」　そう言って私は絶句した。

総勢百人足らず、札幌と長崎の子供たちとそのお母さんたち、ポーランドとバチカンの演奏旅行を終って、全員無事で帰ってきたという。

昭和六一年、当時NHKをやめてN響の理事長をしていた私は札幌の子供たちと一緒にポーランド演奏旅行をした。きっかけは昭和五七年の「地方の時代映像祭」、民放・NHK合同の催しである。北海道テレビが出品した「蝋管はうたった」が受賞した。

病院の療養室で始まった子供たちの音楽活動が次第に実を結んでゆくドキュメンタリーだった。

NHKがわの委員だった私は、この作品に感動した。その後、頼まれて脚本を書いたり演出したりした。結果、六一年にはみんなと一緒になってポーランドの演奏旅行までやってしまった。

だがその後、NHK会長になった私には充分な時間がなかった。脚本だけ担当することになった。

会長をやめた私にはドッと病が襲った。とくに足がダメになった。

だから今年、三度目のポーランド行きの話があっても遂に同行できなかった。何よりも、子供たちと一緒に外国を旅することが出来ないのが残念だった。ひとつの旅だけで、子供たちは見違えるほど成長するのだ。国際的な感覚を肌で覚えるのだ。音楽を通じて人間と人間とのつきあいの大切さを実感できるのだ。

私に代わって札幌テレビの今田光春報道部長ほかのみんなが行ってくれた。

札幌テレビはこの旅行をドキュメンタリー番組にするという。私も楽しみにし、ゆっくり拝見しよう。

もっと自信をもって、世の中に働きかけようよ。もっと地域の人々の中に入っていい仕事をしようよ。

札幌と長崎の子供たちの明るい顔を見ると私の胸は熱くなる。

放送人よ、もっと熱くなろう！

名作の舞台裏

06年はテレビ史的な名作2本の幕開けとなり、いずれも大盛況だった。（主催 放送番組センター・放送人の会）

◆1月22日

『白い巨塔』（フジテレビ）

出席 唐沢寿明 かたせ梨乃

和田 行（プロデューサー）

西谷 弘（演出）

司会 荻野慶人（放送人の会）

財前五郎・・・唐沢寿明

すべての関係者はまず田宮版「白い巨塔」を意識したという。監督の西谷はサッカーに譬えて、前作は田宮・財前五郎のドリブル中心の個人技に集約して成功したが、今回は医学界や大学付属病院の権力争い、医局の内実、誤診裁判を軸にパス回しのドラマを心掛けたと言う。和田プロデューサーは、キャスティングの裏話を披瀝、東教授（石坂浩二）以下、癖のある布陣を重視、ガン患者を「阪神ファン」に仕立て、夫を励まし看取る妻役のかたせ梨乃など、財前をめぐる周囲の役どころを強調したという。クールまたぎドラマの成功の裏に、役者とスタッフの一体感だったとゲストのやりとりから改めて感じ3時間半であった。

◆2月5日

『おしん』（NHK）

出席 小林綾子（少女編）

伊東四朗（おしんの父親役）

江口浩之（演出元NHKドラマ部）

岡本由紀子（元NHKプロデューサー 現リスプラン代表）

司会 荻野慶人（放送人の会）

平均視聴率52・6％ 最高62・9％を獲得、海外でも大反響を呼んだが、出演者、スタッフ（当時ドラマ責任者だった川口幹夫名誉会長も来席）をまじえまず脚本（橋田寿賀子）のあまりの暗さに戸惑った岡本プロデューサーを「いいじゃないか！」と川口局長は逆に励ましたという。川口さん自身、鹿児島県の寒村育ちでおばあちゃんに育てられ、昭和初期の生活観にみちた脚本に共感したという。おしんのいじめ役伊東四朗は感情移入したファンが自宅におしかけられ困惑、反響のすごさを体験したと。いじめでは佐賀編も地元から抗議が殺到したこともあった。小林は劇中で吹いたハーモニカをだして演奏するなどいう微笑ましい光景もあり、上映の「筏シーン」でハンカチを出す年輩客など、「おしん」の主題は勝組負組の今日、充分に通用する作品であることがわかった。

おしん・・・小林綾子

第8回 放送人の世界

チョン・スウウン（鄭 秀雄）

～人と作品～

進行 今野 勉（放送人の会）

3月18日および19日

（於 放送ライブラリー 会議室）

今回は日韓中東京フォーラムでも柔軟な発想で語りユーモアをたたえた人柄から「チョンさん」と親しまれてきた氏のドキュメンタリスト像を番組ともども紹介しようと企画。

上映作品は『在韓日本人ハルモニたちの戦後半世紀』『百十一年ぶりの追跡 明成皇后（閔妃）殺害事件』『カムチャッカの北朝鮮人たち』『太平洋戦争 最後の外務大臣東郷茂徳』。

いずれも問題提起的型の本格的記録映像の数々であり、なかでも『明成皇后・・・』と『東郷茂徳・・・』は日韓がかかえる「歴史認識」の原点的な事件や人物を映像で綴った力作だった。

クルー取材ではない、いわば「たった一人の調査報道」にみる独自な手法への関心が集まったが、氏は予算がないからと屈託がない。歴史に重心をかけた取材意志を軽妙に語り、さらに氏は、国家や民族だと肩肘張るのではなく、映像ジャーナリズムに「文化のマッサージ師」としての役割を力説した。

師事した牛山純一のありし日の風貌に氏を重ねたのは私だけだろうか。

（記 松尾 写真 伊藤）

←間に七十本以上の企画を実現させます。

近藤さんの「証言」では、NHKの職制の中にプロデューサー職が確立される経緯が語られます。近藤さん自身がプロデューサーへの道を選んだのは五木寛之原作「朱鷺の墓」の制作からでした。土曜ドラマ枠では「松本清張シリーズ」「男たちの旅路」シリーズ、大河ドラマでは城山三郎原作の「黄金の日々」、山田太一作「獅子の時代」など野心作の思い出が次々に語られます。近藤さんのプロデューサー論は、プロデューサーとディレクターとの関係です。プロデューサーとは

「何かを企画するっていうことはですね、自分がほかの人に対して何を問いかけたいのか、ということだと思うんですよ。それはどんなことでもいいから、何でもいいから何かを問いかける、それをその、じゃ何かを問いかけるためにはどういう方法がいいかっていうのが初めて（企画の）方法として出てくるわけですね」

「証言」にご登場願おうと取材交渉のさなかに、久世光彦さん（70歳）が急逝されました。

残念です……合掌 （久野）

「あの夏は、いやに空が澄んで青かった。変に広々と何処までも続く青空であった。懐とした青空であった。きっとあの夏は、昭和の中でいちばん空の青かった夏に違いない」8・15の記憶

（「昭和幻燈館」より）

放送人の証言（14）

プロデューサー列伝

記　久野浩平

まず 中道定雄 さん。ＮＨＫ入局は一九四一年、報道部に配属、十二月の開戦後は大本営発表のニュースにまみれ、四四年応召、復員後は実況課でドキュメンタリーの嚆矢と言える「社会探訪」を殆ど一人で担当します。やがて演芸課に移り、「話の泉」「二十の扉」「三つの歌」「私は誰でしょう」「とんち教室」など次々と人気クイズ番組を開発、クイズの専門家と呼ばれました。ただ、この時期、現在で言うプロデューサーの職制はありませんでした。出演者と一緒に新聞写真に写ると「Ａさん、Ｂさん、一人置いてＣさん」と、担当プロデューサーは一人置かれるのがきまりだったという「証言」は苦笑を誘います。

中道さんはこの後テレビ文芸部長として「花の生涯」「赤穂浪士」「大閤記」と続く大河ドラマを発足させました。時代劇に現代とのつながりを持たすために西暦を採用し、「大閤記」ではドキュメンタリストの吉田直哉さんを起用、いきなり新幹線が走る画期的なアバンタイトルのアイドルも中道さんの示唆によるものでした。

「やはり放送はアナウンサー。プロデューサーなりディレクターなりというものはその蔭に隠れ、表に出て脚光を浴びて紫綬褒章を貰うまでにはかなり長い道のりがあったと思いますね。めぐまれない時代のいわゆる縁の下の力持ちとしては、私共の、今八十何歳になった連中がみんな同列にその縁の下の力持ちだったと思うんですね」：

石井ふく子 さんです。石井さんと放送との関わりは、日本電建で自社提供のラジオドラマ・シリーズ「人情夜話」の制作に携わったことから始まります。

五七年ＴＢＳに入社、「東芝日曜劇場」の創始者田中亮吉さんのＮＥＴ移籍により、その後継者として迎えられたのでした。それからほぼ四十年、一七八八回続いた「日曜劇場」の歴史が石井さんの「証言」の中心である当然です。最初のプロデュース作品、三島由紀夫原作「橋づくし」のこと、「かみさんと私」大ヒット作「愛と死を見つめて」などの思い出、山本富士子、司葉子、山田五十鈴、香川京子、渡辺美佐子、京塚昌子さんたち数々の俳優さんたちとの交渉のエピソードが語られます。話題はこのあと、「ただいま十一人」「ありがとう」「肝っ玉かあさん」とホームドラマの歴史におよんでゆきます。

「いまタレントって言葉があるんですけども、あの時代タレントという言葉なんかなくて、それとプロデューサーって言葉もなかったんですよね（中略）で、だんだんスタッフも出るようになって今、ま、プロデューサーっていう職種が確立したんですけれども、プロデューサーって名前は大分あとになってからだと思います」

原田庸之助 さんは五一年電通入社、出版広告から五三年ラ・テ局に移り、テレビ番組の制作に携わります。

原田さんの「証言」はまず、敗戦直後の四五年十二月に商業放送の設立計画が吉田秀雄さんたちの手で始動したという秘話から始まります。実際に民放ラジオが開局したのは五一年九月ですが、当初から電通は番組制作に深く関わります。テレビ開局後も、例えばＴＢＳの「日真名氏とび出す」では企画、脚本、出演者、美術はすべて電通の仕込みでした。

「証言」では「コメディー・フランキーズ」「剣」「女ねずみ小僧」「意地悪ばあさん」「水戸黄門」「木枯らし紋次郎」、初めての3時間ドラマ「海は甦る」等々、原田さんが制作に関わった経緯や裏話が語られます。その後、原田さんはテレパックに移り、プロデューサー活動を続けました。

「電通というのはね、影武者じゃないけど、大体が広告代理店業でしょ、だからスポンサーの代理でもあるし、媒体の代理でもある。両方の間に立ってやるというんでね、なるべく表へ出ないのが、あのう、もう常識になってるわけね（中略）。『水戸黄門』の途中から初めてタイトルで企画逸見稔、プロデューサーに西村俊一と郡の名前が出た。それまでは電通スタッフなんか書いてない。はじめて電通の奴がタイトルに出たなあ、って一種の感慨みたいなのがあったんだけどね」

武敬子 さん。五五年、ラジオ九州（現ＲＫＢ毎日）東京支社に入社、五八年、初めて作ったラジオドラマ谷川俊太郎作「遠いギター・遠い顔」で民放祭の大賞を獲得します。矢代静一、安部公房、福田義之、寺山修司さんたちと数々のラジオドラマを作ったあと、六四年からテレビドラマのプロデュースを始めます。武さんの「証言」の大きな部分を占めるのは秋元松代さんの思い出。「山ほとときすほしいまま」や芸術祭賞を受けた「海より深き」などの企画に触れ、さらに秋元さんのもつ偉大さ、純粋さ、娟介さについてのエピソードが深い愛情をもって語られます。七二年、テレパックに移籍し「みんなで七人」「三男三女婿一匹」「野々村病院物語」「男女七人夏物語」その「秋物語」など次々に人気番組をプロデュースします。

「証言」は森繁久弥、西田敏行、山田邦子、夏目雅子、明石家さんま、大竹しのぶさんたちについて語る武さん独特の鋭くて楽しい内容はそのまま俳優論になっています。

「ね、何でも持ってらっしゃいという状態じゃないと。でも物凄く、やっぱりそうゆう状態の中では、やっぱり人間を洞察していく力とかさ、それが要るんだろうね。もっと洞察力があったら、もっといい仕事ができたかもしんないなと思うと、もっとやっぱり、目茶苦茶な状態で、あのう、仕事ができたかもしれないなと思う。でも面白いけどね」

最後は 近藤晋 さんです。近藤さんは劇団民芸で音響効果や菅原卓さんの演出助手を経験、五九年ＮＨＫに入局、最初はラジオでしたが、翌六〇年テレビに移り、フィルムドラマ番組「テレビ指定席」の制作を担当、企画こそドラマの原点である、という信念で三年

←（左段へつづく）

連載随想

題名のないエッセー（第2回）

磯村健二

昭和18年生まれの私が物心ついたときに、先ず耳に入ってきたのは、FEN（進駐軍放送）から洪水のように流れ出ていたダンス・ミュージックやジャズ、そしてトスカニーニ指揮のNBC交響楽団などのクラシックであった。

まもなく民放の誕生、そしてテレビ放送開始の時代になるわけだが、来日音楽家もまだ少ない頃、私にとっての貴重な海外の音楽情報は、『オーケストラの少女』『彼らに音楽を』『カーネギーホール』『未完成交響楽』などの名音楽映画と共にラジオがすべてであった。

当時、秋葉原の電気街に行くと、NHKの中古のスコッチ6ミリテープがミカン箱のなかにぐしゃぐしゃに巻かれて売られていた。同じく中古のリールと共に多量に買い込み、どこで覚えたのか、セロテープ（スプライシングではなく）を斜め切りしてクズテープを繋ぎ、リールに巻きつけた。そして片っ端からラジオの音楽番組をアカイのテレコで録音しまくっていたオタク、それが私の少年時代である。後年NETに入社当時「テープ編集は磯村にまかせておけ」と重宝がられたほどであった。

そんな時代に活躍された放送人の一人に上浪渡（わたる）さん（故人）がいる。NHKの音楽プロデューサーで前回ご紹介した堀内敬三さんと同じく、尊敬する大先輩であると同時に放送音楽の開拓者である。

NHKは昭和30年に電子音楽の放送を開始している。電子音楽といっても現在のデジタルではなく、まだ開発中であった6ミリ磁気テープを切り張りしたり、ダビングしたりの手作業であった。当時、超前衛であったドイツの作曲家、シュトックハウゼンが始めたミュージック・コンクリートの手法の一つで日本では後年、私が番組でお世話になる作曲家・黛敏郎さんが二十代で取りくんでいる。

その実験的試みは上浪さんと黛さんのコンビで開始される。この成果が昭和39年の東京オリンピックの開会式で流された日本全国の梵鐘の音をコラージュした音楽であった。

上浪さんの業績の一つに昭和31年のイタリア歌劇団の招聘がある。本格的オペラの引っ越し公演の日本での初めての試みで、過去の経験もなく、右も左も分からない時代に、上浪さんの精力的な働きで大成功を収める。後の海外オペラブームの草分け的大事業といえよう。

上浪さんは退職後、音楽評論家として、特に現代音楽の放送やコンサートの企画・制作・解説などで活躍される。前出の黛敏郎さんの『題名のない音楽会』のブレーンとしても参画され、不肖私も多大な薫陶を受けることになった。

私が大切に保存している上浪さんの年賀状には、毎年かならず冒頭には《HAPPY NEW EAR》（新しき耳に喜びあれ）とあった。

裏方 わが創世期（4）

橋本 潔

昭和27年2月、開局のほぼ一年前に技研スタジオで『新婚アルバム』という短いドラマが実験放送された。山本嘉次郎脚本、山口純演出だった。

立ち会われた映画監督の山本嘉次郎さんは「もったいない、もったいない」をしきりに連発されたと、後に畑中庸生さんから聞いた。山本監督はテレビモニターに画像が映ってる間、ずっとフィルムが回っているものと思い込んでおられたという。この日、技研から帰る連絡バスの中で、自分の手が小さなブラウン管の上で青白くひらひら揺れているイメージがずっと消えなかった。後年、技研時代のスケッチブックが見つかり、この時のスケッチをもとにしたイラストレーションを愛宕山の放送博物館にお渡しした。

「ゴレンラクコウ　エヌエッチケイヒショカチョウ」という電報を受け取り、内幸町におもむき、聞いた一言がいまだに鮮烈に残ってる。「NHKにはラジオの演出家、音響のエキスパートは大勢おりますが、ラジオを絵にする専門家がいないのです」

当時私は東京に出てきて絵描きになるか、舞台美術、照明か、あるいは映画か決めかねていた時期だったが、「ラジオを絵にする」という一言は決定的だった。

10月開局を目指して実験放送を開始すべく9月にはテレビスタジオが完成した。といっても、一階東北隅の事務室を急遽改造したもので、間口は14m、奥行き22m。しかし、その半分は天井わずか2・4mで、その上は窮屈な高さの見学席になっていた。今後の「テレビの普及」のためという配慮からであった。あとの半分が実質的にスタジオとなるのだが、天井まで4mというものの照明のグリッドパイプが設置され、そこにライトを吊り下げるとライトの下から床まで3mしか残らない。床を上げるために二重という台を組んで日本間のセットを飾るには舞台定式の9尺高の壁になる張物が立たない。スタジオの床はカメラの動きをスムーズにするため平滑なグレイのPタイル張り、スタジオとして使える壁2面には、グレイとセピアの厚地の布カーテンが、舞台のホリゾント幕、黒幕に対応するように吊りさげられる。7mしかない側の壁には巾3mの大きな扉があって、この扉を開くと、そこは日比谷通りの歩道だった。ここから大道具、小道具を直接搬入する。しかしこのスタジオは大問題をかかえていた。スタジオの真ん中には90センチにも及ぶ太い柱が存在していたのだ。（つづく）

お知らせ

公開セミナー　名作の舞台裏

『寺内貫太郎一家』

～久世光彦さんを偲んで～

6月9日（金）　13・30～16・30

会場　情文ホール

（横浜情報文化センター6F）

ゲスト　小林亜星　浅田美代子

金子成人　大山勝美

＝投稿欄＝

季節徒然草

返り味と返り咲き

中澤忠正

返り味という言葉があるそうだ。茶道で使われている懐石料理の用語らしい。ひとくち食べて「オイシィーイ！」などという（最近のテレビのグルメ番組定番セリフに乗るような）即効的表層的な味でなく、薄味、あとでうすうすと記憶によみがえってくる深い味なのだそうだ。口に残るのではなく記憶に残る味、というところに味があるのだろう。

もうひとつの、返り咲き、これはよく知られた言葉ですね。言葉としてだけでなく、稀れにではあるが実際にも見かけることがある。

本来ならば春に咲くはずの樹種の花が季節外れの秋になってまた咲くこと。狂い咲きともいう。

以上のような話を最近なにかの本で読んだ。探したらみつかった。佐伯一麦『散歩歳時記』（日本経済新聞社）であった。

著者が子供のころ、家の庭に藤があって父親が丹精して育てていた。それがある秋、狂い咲きして、その翌春からは花をつけなくなってしまった。父親は結局この藤の木を伐ってしまう。

『そのときの無念さは、私の心にまだ残っている』と父はいうのである。

狂い咲きをして、そのあとは花をつけることをしなくなってしまうというのは怖いような話だ。

そもそもこうした返り咲きという現象は植物学上、どう説明されているのだろう。たしかに春と秋は気候的には似ている、といえなくもない。小春日和という言葉はそれをよく表現している。しかし、大自然の深い摂理が、そんな表層的な類似で狂わされてしまうなんてことがあるのだろうか。

山形県の特産で「啓翁桜」とよぶ早咲きの桜がある。山形で早咲き？と首をかしげたくなるが、本当だ。ただし園芸品種である。お正月の生け花用に伐りだされた枝が4～5本ずつ一括りにされ、ほころび始めた蕾をいっぱいつけて東京の花屋の店頭にも並んでいる。ぶらさがった荷札に手書きで『山形直送』などと書かれているのをみつけると、その山形に単身赴任していた頃の殺風景なマンションに、この啓翁桜一抱えをどさりと運び込むなり、一瞬トショリ男の居室には不似合いな艶めかしさが漂った、あの光景が想い出されて懐かしい。

『早咲き』のヒミツはというと、こういうことらしい。

まず晩秋の段階で早めに寒風にさらす。そのあと、温室に移すのだが、出荷時期から逆算してその時期を決める。

桜は、寒気をくぐり抜けたあと、累積気温が一定の水準に達すると開花する、という性質をもっている。それをうまく利用したのが早咲き啓翁桜だというのである。

こんな例から考えるに、春も秋もポカポカ陽気で、よく似ているというだけのことで狂い咲きが引き起こされるとは思えない。ましてや、翌年から、春にも花をつけなくなってしまったとは！一度狂って、そこで開花のエネルギーを使い果たしたのか、いや、エネルギーなら補充ができるはずだ。開花のために樹木の神経系統（？）にインストールされているプログラムがなんらかの不具合でフリーズ状態になってしまったということか。

ともあれ返り咲きというのは面白い現象ではあるが、しかし悲しいようなセツナイような、怖いことなのである。

ニンゲンにもときに、返り咲き現象がみられる。結果的にそうなっているという場合もあるが、意図してそれを実現させたというケースもある。頑張って、見事に、やったぞ！というわけだ。

当人は至極満足だろうし、周囲も声援を送り、ほめそやす。ま、それはそれで結構です。

しかしボクにはどうもそこに不自然さ、というか、返り咲きより狂い咲きのニュアンスを嗅ぎとって、なんとなく落ち着かない。かすかに『悲しいような、セツナイような』そして、敢えて言うと『怖い』ような気分を拭い去れないのである。

日本国はいまや老人国になりつつある。老人は、だから、ボケてモーロクして介護施設に収容されて、世間に迷惑を及ぼさないように、つまり社会的マイナスを最小限度化するような生き方で生きて行くのがいいのだ、などと言ってはいけないヨ！そうではなくみんな生き生きと、引っ込んでしまわずにいろんなことに手を出して、明るく楽しく朗らかに、社会の中に相応の場所をみつけて努力して、そう、極力みんな若返って生きましょうヨ…

というのがよいこととされている。そうだろうなあ、と思わないでもない。が、しかし、しかしだ。そこに、ちょっと無理があるような気がしてならない。狂い咲き、返り咲きの不自然さである。大自然の摂理に抵抗するするなんてことが果たして可能なの？

春には花を咲かせ、夏には葉を茂らせる。秋になったらその葉をそれぞれに色づかせて落としてやり、冬は静かに眠る。これこそが美しい自然だ。

ここで『返り味』という言葉を想い出す。よく味わって少量食べ、静かに座って余韻にひたる。そして『うすうすと記憶によみがえってくる深い味』を楽しむ。こんな素晴らしい文化、老人適応型の文化、が日本にはあった。

よみがえる、のであって、昔の想い出に還っていくのではない。昔を現代にひきよせるのである。昔の本、古典を読むのと同じことだ。古典を今によみがえらせるのである。過去をよみがえらせて未来につなげるのだ。

若者には現在だけが見えている。現在と闘い、現在を生きている、しかし老人には過去と未来が両方とも見える。

そうだ、老人は過去と未来を生き、味わっている。つまり老人の「時間」には返り味がする、と言いたいね。

2mもの細長い段ボールに収まる「啓翁桜」を小生も戴いたことがあります。贈り主は山形放送の大類啓さん。さる年の正月でした。季節随想 を募ります。（松尾）

会員名簿 ・06・5・22現在

（あ）合川明　青木裕子　赤井朱美
秋田完　新井和子　有馬哲夫（い）
石井清司　石井ふく子　石井彰
石高健次　石橋冠　磯野恭子
磯村健二　市岡康子　一色伸夫
伊藤雅浩　井上良介　岩澤敏
岩下恒夫（う）上田千秋　碓井広義
歌田勝彦　宇野昭　浦田彰（え）
江口展之　遠藤利男　遠藤ふき子
（お）大蔵雄之助　太田敬雄
大野木直之　大西康司　大西文一郎
大原誠　大原れいこ　大山勝美
大類啓　大脇明　岡弘道　岡崎栄
岡田晋吉　緒方陽一　岡村黎明
沖野瞭　荻野慶人　小田昭太郎
小田久栄門　（か）加賀美幸子
各務孝　片岡敬司　片島紀男
勝部領樹　加藤滋紀　加藤静夫
金沢敏子　兼歳正英　金平茂紀
加納孝夫　上安平洌子　鴨下信一
河合　肇　川口和久　川口健一
川口幹夫　川竹和夫　川平朝清
河邑厚徳　河村正一
（き）岸田功　北川泰三　北川信
北出晃　北村美憲　北村充史
木村栄文　木村成忠　木元教子
（く）楠美昌　工藤英博　国枝忠雄
（こ）河野尚行　児玉久男
児玉孝光　後藤和晃　後藤多聞
小中陽太郎　近藤晋　今野勉
（さ）斎藤伸久　斎藤守慶
斎藤秀夫　斎明寺以玖子　寒河江正
坂元良江　桜井均　桜井元雄
迫田朋子　佐々木欽三　佐々木彰
佐藤年　佐藤利明　沢口真生
澤田隆治　沢田隆三
（し）重延浩　静永純一　渋谷康生
嶋田親一　清水満　下川靖夫
下重暁子　習田豊　城菊子
（す）菅野高至　杉澤陽太郎
杉田成道　鈴木克明　鈴木昭典
鈴木道明　鈴木紀郎　鈴木典之
須磨章　せんぼんよしこ
（そ）曽根英二　（た）高島秀之
高橋一郎　高橋啓　高橋泰　滝大作
武谷雅博　田澤正稔　只野哲
田中昭男　田原英二　田原茂行
（ち）千葉勉
（つ）露木茂　鶴橋康夫
（と）土居原作郎　戸田桂太
外崎宏司　富永卓二　土門正夫
（な）中崎清栄　中澤忠正
中島僚　中田美知子　中谷英世
中津川輝夫　長沼士朗　中村敦夫
中村克史　中村季恵　中村耕治
中村芙美子　永守良孝　難波秀哉
（に）西川章　新村もとを
西ヶ谷秀夫　丹羽美之（の）野崎茂
野添泰男　野田宏一郎　信井文夫
（は）萩野靖乃　橋口義春　橋本潔
林勝彦　林健嗣　林裕史　原由美子
原田庸之助　（ひ）菱田市彦
備前島文夫　久野浩平　一杉丈夫
（ふ）深町幸男　福田雅子　藤井潔
藤井チズ子　藤代勝博　藤田晋也
藤久ミネ
（ほ）星田良子　堀川とんこう
（ま）松尾羊一　松田輝雄
松平定知　松前洋一　松本明
松本修　松本国昭
（み）三上義智　三国章　水上毅
水野憲一　満島保夫　三村景一
三村千鶴　宮川鐵一　宮脇巌雄
明神正
（む）村上光一　村上紘一
村上憲男　村上雅通　村上佑二
村木良彦
（め）銘苅栄昌　（も）桃井章
諸橋毅一（や）八木康夫　矢島良彰
薮内広之　山県昭彦　山崎隆保
山崎裕　山路家子　山田良明
山田尚　大和定次　山名光紀
山根基世　山辺麻未　山本恵三
（ゆ）湯浅和憲　（よ）横沢彪
横山英治　吉永春子　吉村直樹
吉村誠　吉村光夫
（わ）和田智允

☆新会員紹介

村上光一（フジテレビ）
鈴木克明（フジテレビ）
大野木直之（元フジテレビ）
八木康夫（TBS）

編集後記

グランプリ懇親会が終われば二次会。とくれば、乃木坂『コレド』は桃井チャンちへ行こうぜ、がおきまりのコースで、自称次期代表？鶴橋の康夫ちゃん、自伝小説『ラメール母』（平原社）で退路を絶ち、中原を望む小中の陽ちゃんらが吠えまくり、二人をからかい、且つワインを飲みまくるのが会の酒仙派今野勉、伊藤雅浩、中澤忠正、松尾羊一、鈴木典之の面々。ふだんは安酒の連中、赤ワインをぽんぽん空けさせ、ツマミ無しで「6本、いや8本かな」「10本はいっただろう」。ハメマラすでに機能不全のジジイたち、とどのつまりは飲むっきゃない！でもさ、何が嬉しくて、ちょっぴり不満でこうも飲むんだろう。青春はゴールデン街漬けDNAがなせる集いなんだ、きっと。

雀どの　お宿はどこかしらねども
ちょっちょっと御座れ酒の相手に

蜀山人